

CONTENTS:

- P1 巻頭言「FD活動への期待」
- P2 FDフォーラムを開催しました
- P3 寄稿「FDフォーラムに参加して」
- P4 2013年度後期授業アンケート結果報告
授業アンケート実施内容の変更について

FD活動への期待

情報科学部長 大島 一能



FDという言葉に初めて接したのは、4年前に本学に着任する前の12月のことでした。情報科学部を訪問した際に、偶々開催されていたFDフォーラムの聴講を勧めて頂き、各学科の「基礎演習カリキュラム」等に関する熱心な議論を新任教員として身を引締めて拝聴した事を思い出します。

文部科学省ホームページによりますと、FD(Faculty Development)とは「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」とあり、「具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催など」が挙げられています。本学のFD活動では、これらの事例のほか、他大学との教職員合同研修会や学外の活動への参画など幅広く展開されています。前職の企業では、「常により良いものを目指して変革する」ことを掲げた行動指針に馴染んでいましたが、大学におきましても、絶えざる革新が重要であり、大学教育の一段の質的向上には、新たな変革を支えるFD活動への期待が大きいと思います。

昨今の大学改革の方向性の一つに「主体的な学び」や「PBL型教育」の推進があります。このための施設として、本学では大宮と枚方の図書館スペースを利用して2014年4月に「ラーニングcommons」が開設されます。ここでは、複数の学生やチームが様々な情報機器を活用して議論を深め、資料作成やプレゼンテーションを行う事が可能な「場」が提供されます。効果的な活用のためには、情報機器を随時手軽に利用できるシステムや学生

の自学自習・協働を支援する教職員によるサポートが必要であり、情報科学部でも関係部門と連携して整備を進めて参ります。「ラーニングcommons」は学生が成長する場であると同時に、新しい教育の形を実現するためのFD活動の場としても期待されます。

「主体的な学び」に向けたもう一つの新しい取組みとして、情報科学部では常翔学園「大阪センター」の一部で、実験機材を常設した研究拠点(サテライトラボ)を2014年度から開設する予定です。研究成果の展示や公開講座の開催、企業や自治体との地域連携などに活用するとともに、「デジタル教育開発センター」の工房を設け、MOOC(Massive Open Online Course)や反転授業への関心が高まる中、枚方キャンパスと連携してデジタル教材作成機能の一部を担います。サテライトラボ内の共用スペースは、都心部に設置された「サテライトcommons」として、学生プロジェクトや国際PBLにも役立つ事ができます。学生諸君には新しいチャレンジとなり、また教員にとりましては、デジタル教材やテレブレゼンスシステムを援用して教育・研究の質を高める試みが可能となり、成果を広く共有できる仕組みに結びつけたいと考えています。教職員の皆様方のご支援、ご指導を宜しくお願いいたします。

全学FDフォーラムを開催しました

2013年度第2回（通算18回）FDフォーラム 1月23日開催

今回は関西大学 教育推進部教育開発センター 岩崎千晶先生から「アクティブ・ラーニングを支える学習環境ラーニング・コモンズのデザインを考える」をテーマにご講演いただき、172名の教職員が参加しました。

本学では2014年4月、大宮・枚方両キャンパスにラーニング・コモンズを新設することになっています。岩崎先生の講演に先立ち、益山新樹 教務部長から「OIT Learning Commonsについて」の紹介がなされ、参加者はラーニング・コモンズの意義、役割、および本学ラーニング・コモンズの設置内容について情報を共有しました。

岩崎先生のご講演では、まず、学生の学びを育む学習環境設置の背景、ラーニング・コモンズに代表される学習環境の現状、特徴について分りやすく説明をいただき、続いて、関西大学におけるラーニング・コモンズ「コラボレーション・コモンズ」を事例に、その効果と課題についてお話しいただきました。

関西大学では2013年4月にコラボレーション・コモンズを開設され、教育推進部の先生方が中心となって、正課・課外共に事業間で連携してその活用を図られています。本フォーラム参加者は、本学ラーニング・コモンズの活用方法について、様々な思いを抱かれたようです。



参加者アンケート紹介（抜粋）

- 講義時間以外における学生の様々な活動を支援する場所を提供することの重要性が分かった。非アクティブな学生の利用を拡大するための具体的な方法を導入する必要がある。
- 本学ラーニング・コモンズの展開に大いに参考になった。工学部機械工学科ではPBL教育に力を入れており、ラーニング・コモンズの利用や設備について考える良い機会となった。
- 普段は全く気にしていなかったが、施設として最近よく見かけるようなものがようやく明らかになった。実際にどのように使われているのかについて例が多く、よく分かった。
- ラーニング・コモンズの狙い、現状、課題などが理解でき、本学での開設後にどのように利用するかについて考えるきっかけが得られた。
- アクティブ・ラーニングである正課科目は現状でもいくつかあるが、今後座学の授業をいかにアクティブにできるか検討したいと思った。ラーニング・コモンズは卒研指導、基礎ゼミナール等有効に利用したいと思う。
- いくつかの授業では、グループワークを行った後に課外でまとめさせてプレゼンを課している。議論したり、調べたり、プレゼン資料を作成したりする場があると、活用できてうれしい。
- 時代に合わせた自学自習スペースとして、資料アクセス、電子記述、チームに特徴を持たせることが分かった。4年生以上は研究室にスペースがあるが、1～3年生向けには重要なことである。
- 工学部のものづくり系学科がどのように活用するか、難しさを感じた。
- 学生主体のコモンズに少し懐疑的であったが、思っていたよりも活動されていたので驚いた。本学でここまで活動的になるかは、やはり懐疑的であると感じた。
- ラーニング・コモンズは理系学部には少しなじまないところもあると思っているが、先生のご講演で大きな可能性を秘めていると感じたので、積極的な利用を今後考えていきたい。
- 2014年度から工学部全学科対象のPBL科目が始まるため、この時期にラーニング・コモンズのあり方を考えるのは有意義だと感じた。
- ラーニング・コモンズが学生の自学自習に役立っている様子がよく分かった。学生が大学で学ぶ過程で、特に学びたいと思ったことを学ぶことができるラーニング・コモンズは学生が様々な能力を身につける上で非常に役立つと思った。
- 本学の談話室などでグループ学習している様子を見かけるので、ラーニング・コモンズのような施設が必要であると思う。ただし大きな目標を持って施設を作っても、次第に利用されなくなってしまうように継続的な工夫が必要であると思う。
- 環境改善が学習意欲の向上につながる一つのきっかけになると思った。授業時間外にグループで取り組める課題をうまく与えることも重要だと思った。
- 非常にためになる、刺激のある話を聞けたと思う。本学のラーニング・コモンズで何ができ、何が難しいのか考えさせられた。正課以外にもオープンな場になるかどうか課題であり、学生サポーターが必要だと感じた。
- 学生同士のディスカッションの大切さ、そこから得られる効果について改めて考え、気付くことができた。卒業研究では教員と学生のディスカッションが多くなっているが、そこにもっと学生同士のディスカッションを増やしていけるようにしていきたいと思った。
- 今後の授業においては教室での受講だけでなく、予習・復習・課題への取り組みがますます重要となる。ラーニング・コモンズはそのための必須インフラと呼べるものであり、そのデザインを考える今回のFDフォーラムのテーマは正に時宜にかなっていると思った。
- 学生間のアカデミックな学習への刺激、という点では、従来型図書館ではほぼ不可能だったと思われる。同年代の学生がいかに学び、いかに協同して学習しているのを見せる上で、ラーニング・コモンズは格好の場だと思う。本学でもこの仕掛けがうまく機能してほしい。
- 学生スタッフを含めたマンパワーが非常に重要となると思われた。枚方キャンパスは校舎4階の端に設置ということで、学生への周知をどのようにするかが重要になる。
- ラーニング・コモンズの教育環境は理工系の学生には研究室に配属された以降には十分実現されていると思う。しかし1～3年生には不十分で、大学全体で取り組んでいこうとする意図がよく理解できた。
- 様々な学生に対し、向学心を持たせて学力を引き上げる方法の一つとして、とても参考になった。正課の授業とどのように結び付けていけば、かなり課題がたくさんあるが、本学のラーニング・コモンズを有効に活用したいと思う。
- アクティブ・ラーニングを推進するために、施設・設備を充実させ、システムを生かす人の配置が大切だと感じた。
- 設備だけでなく、大学院生の配置や学生交流の仕掛けなど、運営担当部署を設置して行っていることが重要であると分かった。
- 関西大学での活用事例の紹介、特にLearning Café（教育推進部教員と学生スタッフが講師となり、プレゼン、ライティングをテーマに開くカフェ形式の講座）という「学び方の学びワークショップ」は参考になった。ライティングのサポートと共に、本学でもぜひ実現したい。他方で、学生がラーニング・コモンズのスタッフに過度に依存し、学習者としての自律・自立を喪失しないかという疑問もある。

寄稿「FDフォーラムに参加して」

図書館長・工学部総合人間学系教室 教授 深山 晶子

本フォーラムにおいて紹介された関西大学のラーニング・コモンズ（関西大学での名称：コラボレーション・コモンズ）の運営例は、既にラーニング・コモンズを試行している大阪工業大学図書館にとって、非常に示唆に富む内容であった。特に、講師の岩崎先生が指摘された「コモンズの学習環境においては、『モノ』、『ヒト』、『コト』の3つが揃って初めて学習者の自律的学びが成立すること」及び「コモンズは、自律学習の場であるとはいえ、正課学習を深める場でもあり、正課授業との連携が重要であること」の2点は、ラーニング・コモンズの成否を判断する重要な指標だと言える。この2指標を念頭に置いて、大工大図書館のラーニング・コモンズについてチェックしてみた。

大工大図書館でラーニング・コモンズ計画が始動したのは3年前である。

まず、大宮キャンパス図書館4F閲覧室の学生の自習スペースの一部をコモンズとして選定した。だが、『モノ』の状態は最悪で、床に固定された大机と古びた椅子しかなく、学習ツールはPCエリアのデスクトップパソコンのみ。学生に協力を求めると、何人かがボランティアで駆けつけ、持参の工具でレイアウトの変更を手伝ってくれたりして誕生したのが、4F西端の、小さなラーニング・コモンズスペース「AIR」である。

スタートから2年目には、『コト』の試みとして、模擬国際会議（MIC）や、図書館の企画展、語学学習など各種講習会などにAIRのスペースを利用してもらってPBLを展開。これらのPBLは、ボランティアの学生や勤務時間外にも働いてくれた図書館スタッフや諸先生方の御協力で成功。『コ

ト』は『ヒト』の支えがあってこそ成功する、と実感した。

3年目の昨年には、大阪工業大学後援会の援助で、可動式机や椅子やパーティションやホワイトボードが備わり、コモンズのスペースを少し広げた。多くの『ヒト』の協力を得て、ライブラリーカフェ等のイベントも開催した。だが、『モノ』不足は続いていた。ところが、幸いにも、大学当局の努力で文部科学省の補助金申請が採択されて、枚方分館を含む全館に、新しい什器や備品が入ることになった。それに併せて、狭かったコモンズのスペースを一挙に広げることになり、この4月、大宮本館4F全体がコモンズに変貌する。

今後の課題は、正課授業との連携を含む、更なる『コト』の充実だが、教務課や各学部の全面支援による正課授業との連携が期待できるので、楽観している。

チェックして痛感したのは、上記の如く、大工大図書館のラーニング・コモンズが、恵まれた教育環境で展開していることである。その追い風を意識して、今後に臨みたい。

ラーニング・コモンズの運営は、各大学の教育環境に違いがあり、ある大学の試みが、即、他大学に有効であるとは限らない。それぞれの大学に最も合った方法を導入するのがベスト。今回のFDフォーラムの講演は、その最適の方法を考える上で大変参考になった。



情報センター長・情報科学部情報ネットワーク学科 教授 山内 雪路

「アクティブラーニング」という言葉を筆者が知るに至った時期は数年前のごく最近です。しかし背景にある学習スタイルの変革という考え方は相当古くから認識をしていました。とりわけ筆者の専門分野では、ネットワーク技術の社会への浸透がもたらすイノベーションが、(1) 最初は人々のワークスタイルを変革する、(2) 次に人々の生活のスタイルを変革する、(3) その次にエンターテインメントのあり方を変革する、(4) 最後に学校教育のあり方を変革する、という考え方がよく紹介されています。ICTを活用したアクティブラーニングという考え方は、まさに我々理工系大学の教員が真剣に取り組むべき喫緊の課題であろうと考えられます。

今回のフォーラムでお話を伺った関西大学様の事例では、とすれば入れ物の設計や配置する設備の設計にとらわれがちなラーニングコモンズの設計・運用で、多くの学生さんを引きつける要素を上手にミックスして実現されておられると感じました。マンモス総合大学と理工系中堅規模大学との違いはさておき、私たちのラーニングコモンズ設計にたいへん参考になるお話を伺えたと感じます。どこでも通用する普遍的な方針はありませんから、私たちは多くの大学の事例に学んで工大流のラーニングコモンズの

設計を急がなければなりません。

ところでアクティブな学習スタイルの実現方法の一つとして、グループによる学習が推奨されています。私も正課授業・課外勉強会の双方でこのスタイルを実践しており、またラーニングコモンズもこのような場で使われることが期待されています。数年前まではグループ学習により参加メンバーの平均的な能力向上が実感できましたが、最近の状況をふり返ってみるとグループ内で他力本願の姿勢が目立つ学生が増えてきたように感じます。つまり、グループ内の「できる子」はより能力が向上する反面、できる子に頼るだけの学生の存在が目立つようになってきました。処世術は身に付くのですが、グループ学習が頻繁に使われるようになった結果、学ぶ側がそれに順応して省エネ行動に結びついているのかもしれない。

いずれにしても新しい学習スタイルを定着させられるか否かはここ数年が勝負と思われれます。私もあれこれ試行錯誤を試みるつもりです。



2013年度後期に実施した授業アンケートの概要と集計結果を報告します

【実施科目数等】

	第1回目(中間)：2013年11月上旬～11月中旬(授業7・8週目)				第2回目(期末)：2014年1月上旬～1月下旬(授業14・15週目)			
	科目数	履修者数	回答者数	回答率(%)	科目数	履修者数	回答者数	回答率(%)
学部	1,392	64,751	31,328	48.4	1,391	64,911	28,230	43.5
大学院	110	911	479	52.6	109	891	493	55.3
総計	1,502	65,662	31,807	48.4	1,500	65,802	28,723	43.7

【設問項目】

第1回目(中間)設問内容		第2回目(期末)設問内容		選 択 肢		
問1	これまでの授業において良かった点を記入してください。	問2	今後の授業において改善してほしい点を記入してください。			
問1	この授業は、「授業のねらい、到達目標、進め方、使用する教科書・参考書、成績評価方法」について、授業初回に資料などを用いて説明が適切に行われましたか？	問2	この授業は、シラバス記載内容あるいは授業初回の説明に沿って進みましたか？	5：適切であった	4：ほぼ適切であった	3：どちらとも言えない
問2	この授業は、学生の理解度を配慮しながら進められましたか？	問3	この授業は、教員の話し方は明瞭で、わかりやすかったですか？	2：あまり適切でなかった	1：まったくなかった	
問3	この授業は、黒板の使い方、文字の大きさ・見やすさ、映像資料の図や文字の見やすさ、は適切でしたか？	問4	この授業は、内容の理解し到達目標を達成するのに適切でしたか？	5：進んだ	4：ほぼ進んだ	3：どちらとも言えない
問4	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	問5	この授業1回あたり平均して、予習・復習・レポート作成・課題作成(準備)に何時間かけましたか？	2：あまり進まなかった	1：まったく進まなかった	
問5	総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか？	問6	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	5：強くそう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない
問6	この授業を良くするための意見、改善して欲しい事項があれば入力してください。	問7	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	2：あまりそう思わない	1：まったくそう思わない	
問7		問8	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	5：適切であった	4：ほぼ適切であった	3：どちらとも言えない
問8		問9	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	2：あまり適切ではなかった	1：まったく適切ではなかった	
問9		問10	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	5：100%～90%	4：90%未満～80%	3：80%未満～70%
問10		問10	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	2：70%未満～60%	1：60%未満	
		問10	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	5：3時間以上	4：2時間台	3：1時間台
		問10	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	2：30分～1時間	1：30分未満	
		問10	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	5：強くそう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない
		問10	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	2：あまりそう思わない	1：まったくそう思わない	
		問10	あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか？	自由記述		

【第2回目アンケート集計結果】 ※大学院を除く

学部	学科等	科目数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9
工 学 部	共通科目	305	4.19	4.22	3.97	4.03	4.05	4.01	3.37	2.25	3.94
	都市デザイン工学科	40	4.22	4.23	3.97	3.98	3.94	4.00	3.61	2.66	4.03
	空間デザイン学科	44	4.23	4.29	3.99	4.11	4.07	4.02	3.46	2.62	4.18
	建築学科	47	4.21	4.22	3.87	3.95	3.93	3.95	3.26	2.82	4.01
	機械工学科	93	4.20	4.22	4.03	4.06	4.03	4.04	3.57	2.57	4.06
	ロボット工学科	39	4.28	4.31	3.98	4.04	4.08	4.01	3.43	2.70	4.08
	電気電子システム工学科	45	4.16	4.21	3.94	3.99	3.97	4.00	3.40	2.45	4.04
	電子情報通信工学科	65	4.14	4.11	3.84	3.89	3.92	3.87	3.36	2.64	3.94
	応用化学科	52	4.32	4.33	4.03	4.09	4.10	4.09	3.54	2.84	4.09
	環境工学科	33	4.19	4.21	3.92	3.97	3.94	3.96	3.45	2.88	3.98
	生命工学科	38	4.05	4.02	3.76	3.81	3.88	3.85	3.42	2.80	3.88
	技術マネジメント学科	4	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	3.50	2.25	5.00
	生体医工学科	22	5.00	4.33	4.00	4.33	4.33	4.67	3.00	3.67	5.00
情報学部	共通科目	108	4.03	4.03	3.83	3.86	3.88	3.88	3.22	2.20	3.81
	コンピュータ科学科	79	4.05	4.07	3.79	3.87	3.90	3.86	3.19	2.53	3.84
	情報システム学科	68	4.12	4.13	3.80	3.87	3.87	3.89	3.26	2.63	3.90
	情報メディア学科	78	3.92	3.97	3.62	3.68	3.72	3.70	3.21	2.71	3.64
知的財産学部	情報ネットワーク学科	67	3.97	4.01	3.59	3.70	3.76	3.68	2.95	2.48	3.64
	基礎教育科目	33	4.32	4.34	4.12	4.15	4.13	4.13	3.44	2.61	4.13
	知的財産学科	103	4.29	4.22	4.13	4.18	4.15	4.12	3.59	2.55	4.09
教職科目	28	4.26	4.16	4.18	4.26	4.16	4.17	3.39	2.30	4.19	
平均(合計)	1,391	4.17	4.18	3.92	3.98	3.99	3.97	3.38	2.50	3.95	

授業アンケート実施内容の変更について（お知らせ）

2014年度から実施内容を一部変更することが2014年2月13日開催のFD委員会で承認されました。ご協力をお願いいたします。

項 目	2013年度	2014年度	変更理由
第1回目(中間)アンケートの実施	実施 <記名>	廃止	第1回目(中間)アンケートは、ミニッツペーパー的な役割のアンケートとして、2011年度後期から導入し計5回の実施を終え、半期15週の中間時点における学生の率直な意見内容は、ほぼ得ることができたと思われま。2014年度からは期末のみの実施とし、ミニッツペーパー的な中間アンケートは各授業担当者が必要に応じてC-learningにて実施をお願いします。 *授業担当者に活用いただけるよう、C-learningには可及的速やかに履修学生のデータを整備し、ミニッツペーパー、クリッカー等のフォームを準備します。
第2回目(期末)アンケートの実施	実施 <無記名>	実施 <記名>	2011年度前期にC-learningを導入した際、全学的に無記名式に統一し、その後、第1回目(中間)アンケートのみ記名式で実施していました。2014年度からはIR(インスティチュショナル・リサーチ)実践の見地から全学的に記名式に統一し、「授業アンケート結果と学生の成績状況の相関調査」等の基礎データとして活用します。
学生へのフィードバック	履修している科目のみ、集計結果を閲覧できる	全ての科目について、集計結果を閲覧できる	文部科学省は、「学生による授業評価」の結果活用として、次の例に示す全学生へのフィードバックや施策に活用されることを求めており、本学においても改善します。 例① 全学部において、授業選択の参考として各授業の評価結果を学生に開示している。 例② 評価の高い教員への顕彰や低い教員に対し改善計画書の提出を義務付けることなどの制度的取り組みを実施している。*正式な運用については今後、各種委員会協議します。

～FD NEWSを教職員の情報共有にお役立てください～

学部・学科・小グループ・個人での取り組みや活動をFD NEWSに投稿してください。
授業運営上の悩みを解決した方法などがあれば情報共有していきましょう。

【お問合せ先】

大阪工業大学教務部教務課
TEL.06-6954-4083
FAX.06-6954-4049
kyoumuka@ofc.oit.ac.jp